

## 「包」の「特殊性」から読み解く「中国経済のシェーマ」(その一)

— 柏祐賢と加藤弘之が探し求めた中国研究の核心 —

原田 忠直<sup>1</sup>

### 要旨

柏祐賢と加藤弘之は、時を越え「包」によって結ばれた研究者である。本稿では、この2人が論じた「包」論をベースにして、筆者の「包」論を展開する。そして、その先に、停滞要因と発展要因の二面性を内包する「包」の特殊性から「中国経済のシェーマ」を描き出す。なお、本稿は、その第一歩として、柏祐賢の「包」論を詳細に論じる。次号以降では、Ⅱ. 加藤弘之の「曖昧な制度」、Ⅲ. 「包」の特殊性と「中国経済のシェーマ」、Ⅳ. 「包」と自由論、Ⅴ. 「包」と三元構造、と続く。このような分析を通し、柏と加藤が探し求めた中国経済の核心を明らかにする。

キーワード 「人本主義」、「包の重層化」、「市場外価格」、「確定化」、「不確定化」

### はじめに

本稿では、柏祐賢<sup>2</sup>と加藤弘之<sup>3</sup>によって展開された「包」<sup>4</sup>論を再考し、「包」という一つの経済システムが内包する「特殊性」を明らかにする。そして、その先に、「これまでとは異なる枠組みで経済学を捉え直す、ある種の糸口」(加藤 2016 p.210)を探し求めた加藤に従い、その糸口を追求すること、言い換えれば、「高度な統計分析や理論モデルを用いて」<sup>5</sup>分析を進めるのではなく、あくまで「包」という「中国的なるもの」<sup>6</sup>から「中国経済のシェーマ」を浮かび上がらせることが本稿の目的である。すなわち、本稿は、「包」の「特殊性」から「中国経済のシェーマ」を構築する試みである。

当然、このようなアプローチを採ることは、西洋近代主義に対する抵抗がある。もちろん、「中国経済のシェーマ」から「世界を見出す」つもりは毛頭ない。さらに、中国が経済大国

へ台頭するなかで、その「シェーマ」がやがて世界を圧巻するだろうとは夢にも描いていない。ただ、「西洋に世界を見出す」、「西洋の発展にどの国も追随する」という考え方をそのまま鵜呑みにできないだけである。あるいは、鵜呑みにしてしまったら、中国研究者としての存在意義、さらには、中国研究そのものの必要性が問われることになる。それゆえ、「中国的なるもの」にこだわった点では、先駆者の一人とでもいうべき柏に着眼すること、さらに、志の半ばで倒れた加藤を継ぐことは、日本における中国研究にとって、決して無意味なことではないはずである。

柏と加藤は、「中国的なるもの」としての「包」にこだわり続けたのだが、周知のように、二人が触れた中国社会は大きく異なる。柏は中国革命前夜の民国期、加藤は、主に改革・開放後の中国社会が研究対象であった。つまり、二人の間には、おおよそ 60 年ほど

の隔たりがある<sup>7</sup>。ところが、不思議なことに、両者の著作を読むと、時を越えて、「包」を発見した時の高揚感が伝わってくる。中国というフィールドを歩く中で、「包」という経済システムを掴み取ったとき、それまでの学問的蓄積だけでは、なかなか解明できなかった中国経済に潜む不透明さが、二人の頭のなかで鮮明になっていく様子を伺い知ることができる。まさに、「これだ！」と膝を叩く音が行間から聞こえてくるようでもある。しかし、柏と加藤が、「包」という一つの経済システムから導き出した結論は「真逆」である。柏は、中国革命前夜の中国社会のなかで、「包の倫理規律」に従う人々の姿を炙り出し、それが、技術革新、資本蓄積などを妨げる要因を形成し、中国経済の「停滞のシェーマ」<sup>8</sup>を浮かび上がらせた。逆に、加藤は、「包」から着想して、中国社会に潜む「曖昧さ」を発見し、それが「高い経済効果」を生み出す要因と捉え、改革・開放以降における中国経済の「発展のシェーマ」<sup>9</sup>を世に問うた。

なぜ、「包」という一つの経済システムから、「停滞のシェーマ」と「発展のシェーマ」という「真逆」な結論に辿り着くことになったのだろうか。この異なる結論を前にして、少なくとも加藤は、どのようにして柏の「包」を論破したのかを、論理的に説明しなければならなかった。しかし、残念ながら、その作業は途中で終わってしまった、という感否めない。

もっとも、改革・開放以降における中国経済の急成長は、柏の「停滞のシェーマ」を過去の遺物へと吹き飛ばすには余りある力がある。もちろん、そうした実際の状況だけで、柏を乗り越えたとはいえない。むしろ、そのような状況は、かえって加藤を大いに迷わすことになったはずである。なぜならば、加藤は、現代の中国に、柏が発見した「包」を再発見し、一方では、上述したように大きな高

揚感に包まれたであろうが、他方で、柏の「包」を受け入れると、目の前に広がる状況との矛盾に直面したからである。加藤の口元から、「柏の包では現代の中国を説明できない」と幾度も零れ落ちたのではなかろうか。

ところが、加藤は、柏の著作を読み進めるなかで、次のような一節に目が留まったのではないか。それは、「われわれはここで、なお若干のそれに関する学史的考察を行うべきであるかも知れないが、いまはそれをば止め、その後においても、経済学者の間には、このような中国経済の停滞性が深く信じられていることだけを指摘するにとどめておこう」という箇所である(柏 1986aa p.332)。そして、こうした柏の非科学的とでもいうべき側面から翻って、加藤は「中国イコール停滞とする当時の通説的理解の制約から、柏自身が自由ではなかった」と断言するに至る(加藤 2010 pp.39-40)。と同時に、「包」イコール「停滞」という呪縛から解放され、「曖昧」という言葉を用いて「発展のシェーマ」を描き出す。しかし、それは、次章(次号)以降で詳しく述べるように加藤による柏の「包」論の取捨選択にほかならなかつたし、なかでも、柏の「停滞のシェーマ」の中核をなす「利潤の社会化」論の軽視へとも繋がるものであった。つまり、現在の中国社会のなかで「包」を再発見した加藤は、それが、経済成長の役割を担う一つの経済システムであると高い評価を下すため、「包」の機能の一部を取り出したに過ぎない。また、上述したように柏の「包」についての分析は必ずしも十分とはいえない。もっとも、加藤が、「曖昧な制度」の下で「高い経済効果」が生まれることだけを論証したのであれば、問題はなかつた。しかし、「経済学を捉え直す、ある種の糸口」を求め、あるいは、遺作の表題に示したように、「中国経済論」ではなく「中国経済学」へと昇格するための通過点とすることに、その研究の大きな目的を求めたとす

るならば、加藤の「発展のシェーマ」は、中国経済を語る上で、「片肺」といわざるを得ない。

何故、加藤は、「高い経済効果」という点にこだわり続けたのだろうか。それは、やはり目の前ですさまじい勢いで展開した「中国の経済発展」に捕らわれ過ぎたためではなかろうか。確かに、改革・開放後における中国経済の発展要因、発展の段階を探ることは、加藤に限らず中国研究者の大きな目的であったことに違いない。また、近年、巷にあふれる「中国脅威論」、「中国経済崩壊論」への反論を強く感じていたのかもしれない。しかし、いかなる理由があったとしても、加藤が、「高い経済効果」、あるいは「発展のシェーマ」に拘束されたことは、加藤自身が、「中国イコール発展とする現代の通説的理解の制約から自由ではなかった」といえる。

ただし、加藤も、柏と同じく「通説的理解の制約」から「自由」ではなかったが、だからといって、彼らが導いた結論が、陳腐化しているわけではない。柏の「停滞のシェーマ」は、改革・開放後の経済発展のなかで、もはや無意味なものであるとか、加藤の「曖昧な制度」から導かれた「発展のシェーマ」が、今後、中国経済が停滞期に突入した時、過去の遺物のような扱いを受ける必要はない。言うまでもなく、二人の研究は、「包」についての考察をより深めるための一筋の光であり続けている。むしろ、それぞれの「シェーマ」を説明するために選択した「包」の機能が異なっていた事実は、そこに「包」の「特殊性」、あるいは「中国経済のシェーマ」を読み解く上で重要なヒントが隠されているのではないだろうか。少なくともわたしたちは、柏と異なり、民国時代、計画経済時代、改革・開放

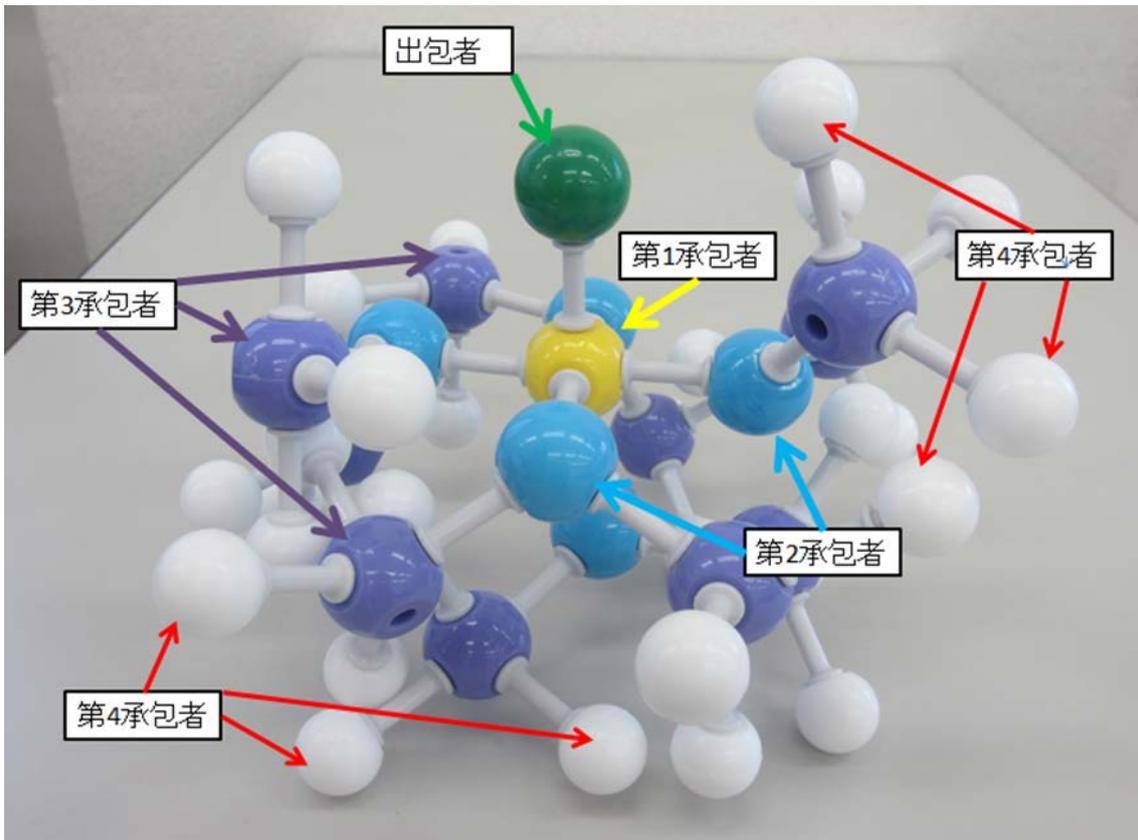
後というそれぞれの時代の中国を眺めることが可能な場所に立っている。また、経済発展を遂げる大都市で豊かな生活を享受する人びと、その大都市の片隅で汗水流して生きる農民工、農村で寡黙に大地を耕す農民を、幾度もこの眼に刻んでいる。そして、なによりも、「停滞のシェーマ」と「発展のシェーマ」を同時にテーブルの上に広げて、見比べることが許されている。もちろん、加藤もこうした立ち位置にいたわけであるが、病魔が自らの論を相対化し、俯瞰する時間を彼に与えることはなかった。

それゆえ、本稿では、「停滞のシェーマ」と「発展のシェーマ」とを比較検討しながら、その上で、「中国経済のシェーマ」を明らかにしたい。以下では、まず、柏祐賢、すなわち「中国的なるもの」としての「包」についての考察から論を起こしたい。

## I. 柏祐賢の「包」論

### 1. 「包」の定義と「人本主義」

柏は、「包」を、「営みの不確定性を第三者たる他の人に転嫁して、もって確定化する秩序」(柏 1986a p.157)であり、「経済者の営みの不確定性を、とくに人と人との間の取引関係において、確定化しようとする規範」(柏 1986a p.157)であると定義する。そして、「挿入せられる第三者は、さらに自らの営みの不確定性を、他の第四者に転嫁負担せしめる」(柏 1986a p.157)とし、「包」の重層化構造を明示する。すなわち、「包」とは、人と人があたかも数珠つなぎのように結びつきながら、一つの「重層的な不確定性転嫁の構造」を形づくる、としている(柏 1986a p.157)。



【写真1】

このように柏は、「包」を定義するが、これらの言葉を並べてみても、なかなか「包」を理解することは難しい。そのため、まず、ここでは、この定義を立体的に捉えることから始めたい。写真1は、筆者が視覚的に描いた「包」である。写真1に写る球体は「人」を表している。そして、これら「人」のなかで、「出包者」（柏は「東家」と表記するが、以下では、柏の引用以外は「出包者」と統一する）と記されている「人」が、契約を提示する者、あるいは投資者にほかならず、「包」の構造の中心をなす。そして、その「出包者」から繋がっているのが、「承包者」（柏は「掌櫃的」と表現するが、以下では、柏の引用以外は「承包者」に統一する）であり、契約を請負う者、あるいは経営者である。さらに、その「承包者」から第3、第4への「承包者」へと繋がりが、1人の「出包者」から無数の人びとが数珠繋ぎに「人と人」の関係が広がっている

ことを示している。もっとも、このような「人と人」の結びつきだけで、「包」の構造を理解することはできない。少なくとも、それでは、ただ「請負いの構造」を表現しているだけに過ぎず、そのようなものならば、中国に限らず、「下請け」、「系列」などと呼び方は異なるが、どの国においても見出すことは可能である。たとえば、日本であれば、トヨタ自動車をみれば、その下に、第一次下請け、第二次下請け、第三次下請けと、請負い構造が幾重にも重なり合っている状態を思い起こすことは容易である。

では、日本の請負い構造と「包」の違いはどこにあるのか、また、同様な請負い構造でありながら、なぜ、「包」から「停滞のシエマ」が描かれることになったのか。この疑問に答えるため、以下では、まず、柏が捉えた「人」そのものに焦点をあて、分析を進めたい。

第1に、柏は、「包」の特徴を、なにより

も「人」の倫理、規範、あるいは、「人と人」の関係性に求めている。ただし、柏が求めた倫理観、規範は、マックス・ウェーバーが中国経済の停滞を明らかにするために用いた宗教的倫理とは異なる。柏は、「ウェーバーは、中国経済の個性を、経済のうちの問題として取り扱うことをせず、経済の外の倫理的な規範によって、これを説明しようとしたのであった」（柏 1986a p.305）とし、ウェーバーを退けている。そして、「経済の内側に倫理を発見することによって、経済秩序の個性を認識しようとする立場に立つべきである」（柏 1986a p.309）とする。すなわち、経済活動を営む「人」を考察対象の中心に据え、その主体性がいかなるものであるのかを解明することが、研究の主眼であったといえる。言い換えれば、「停滞のシェーマ」の主な要因は、主体的に経済活動を営む「人」の倫理にその答えが潜んでいると、柏は、強く考えていたといえよう。

第2に、柏は、中国経済社会を「資本主義的な経済社会ではない」と断言し、「「包」的な個性的規律を持つところの、極度に「人」と「人」との間柄的關係の意義を持つ、いわば人本本位的の秩序なのである」とする。そして、そのような状態を「人本主義」と名付ける（柏 1986a p.318）。この言葉には、中国経済を考察するなかで、どこまでいっても「人」という壁にぶち当たり、「人」抜きでは、中国の経済秩序を語ることはできないという意味にほかならない。たとえば、写真1の「出包者」から「承包者」への資金を、柏は「未だ資本ではない。営業に必要な限度の貨幣額」（柏 1986a p.264）に過ぎないと捉える。本来、「出包者」の資金は、その人格から離れ資本へと転化し、資本を中核とした社会的信用が成立することが、「資本主義」の条件とするならば、中国にはそのような状況は依然として生まれておらず、どこまでも、「人と人」の

関係が、「人と人」の直接的契約関係が社会秩序を形成しているとする（柏 1986a p.264）。一見すれば、このような「人本主義」という結論を導き出せば、その段階で、中国の「停滞のシェーマ」の大半は描き出されてしまったのではないかと考えることも可能であろう。とくに、ヨーロッパの発展した「資本主義社会」と比較すれば、中国の後進性は、この「人」をもってして白日の下に晒されたようなものである。しかし、柏は、中国には「ヨーロッパの経済社会的意味における合理性は存在していない。しかしそれが合理的でないのではない。どこまでも人本主義的であるが、その限りにおいて極度に合理性の追求されている秩序である」とし、「中国経済秩序は、まことに見事な合理的秩序である。中国的個性において、人本主義的合理的秩序である」（柏 1986a p.319）と評する。このように柏は、「資本主義」と「人本主義」の間になんらかの優劣を決めるための境界線を引くことはなく、少なくとも「ヨーロッパ＝先進性」、「中国＝後進性」という区別を決めつけていたわけではなかった。ただ、彼は、両者の違いを「個性」という言葉に置き換え、この「個性」に基づき形成される合理的秩序こそが「中国的なるもの」であり、そこから「停滞のシェーマ」を描き出そうとした。言い換えれば、どこまでも「人」を中心に据え、その「人」が編み出す秩序を追求する視点に、柏の研究スタイルを垣間見ることができるであろう。このような研究スタイルに対して、筆者は、柏の「人」を追い求めた眼差しに強い共感を禁じ得ない<sup>10</sup>。もちろん、後述するように柏のすべてを受け入れているわけではないが、少なくとも柏の視点の先に、あるいは柏を乗り越えることによって始めて「中国経済のシェーマ」は描くことが可能であろうと考えている。ただ、以下では、「中国経済のシェーマ」をひとまず脇に置き、柏がどのように「人」

を捉えたか、より具体的にみてみたい。

## 2. 柏が捉えた「人」

柏は、中国の大地に息づく「人」を、「我と汝」、「投機性」、「私人」というキーワードから読み説く。以下、柏が捉えた「人」の特徴を明らかにしたい。

第1に、柏は、「我と汝」という視点から、「包」に繋がる人びとの性質を明らかにする。そもそも、この「我と汝」とは、一人の「人」のなかに共存するものであり、「対物的技術的により優れた能力の人たる「汝」を我の中に見出す」（柏 1986a p.159）という意味である。そして、我のなかに汝を発見するとは、「とりもなおさず自分自身の技術的培養にほかならない。これが、ヨーロッパ経済社会の営みの特色」（柏 1986a p.159）であるとする。写真1を参照にするならば、それぞれの「人」は、「我」のなかの「汝」が経営努力を惜しまず、技術革新、コストダウンのアイデアなどのために、切磋琢磨し、利潤の最大化が目指されるということであろう。しかし、「包」の構造のなかでは、その「人」が、自らのうちに、そうした努力に精を出す「汝」を作り出すことはなく、「包」的第三者は、自己以外に求められた人である」（柏 1986a p.159）とする。つまり、写真1で示された「人」の一つの性質として、すべからず仕事を他者に渡し続け、他者に全面的に依存する寄生的性格を指摘できる。

第2に、柏は、「人」の投機的性格に注目する。上述したように他者に「寄生」する「人」が手にする利潤とは、他者に仕事を請負わせ、その上前をはねることによって生み出される。それは、まるで一つの商品を次から次へと受け渡ししながら中間マージンを取得していくようでもある。それゆえ、柏は「包」は商業に通じている」（柏 1986a p.156）と評する。ただし、「包」とは、商業分野だけに限定された

ものではなく、農業、工業などいかなる業種にも見出せるシステムである。つまり、「包」では、目にみえる商品という実物を受け渡していくだけではなく、その多くは、将来に対する投資であるケースが少なくない。したがって、他者に請負わせたからといって、その仕事が完了しなければ、利潤を手にはできない。しかし、自ら選んだ他者が（あるいはその他者が別の他者をさらに選択する可能性は高い）、無事に仕事ができるかどうかは定かではない。それゆえ、「他者」を選び、仕事を全面的に請負わせるということは、投機的なものであり、まさに「賭け事」そのものであるといえよう。あるいは、そこに、不労所得を目指す、労少なく益を求める「人」を見出すことも可能であろう。

ただし、第3に、上述したように、泡銭を誰もが容易く手にすることはできない。本来であれば、「失敗」をしないよう、「我」のなかに潜む「汝」が自己努力を惜しまないのだが、「包」の構造では、上述したようにそのような「汝」は存在しない。しかし、柏は、「失敗」したときに、「人」の内面に初めて「汝」が作られ、汝は我に向かって「没法子」（「仕方ない」というあきらめの胸中を表す言葉）と告げることになるという（柏 1986a p.163）。そして、柏は、この「没法子」という言葉のなかに、「強い自己意識」を見出し、「投機的な観念は、そのような自己規律の一つの表象である」（柏 1986a p.163）とする。この意味からいえば、「包」に連なる「人」とは、投機的、寄生的という側面だけではなく、人為をもっていかなともしがたいものを熟知した存在であり、柏は、そこに資本主義社会の「人」とは決定的に異なる「人」を発見したといえよう<sup>11</sup>。

第4に、柏は、「人」の「私人」的性格を読み解く。もっとも、この「私人」的性格とは、「包」的に経済活動を行う「人」に限定さ

れたものではなく、中国社会では、「天子」から一般大衆まで、すべて「私人」であるとする。つまり、この「私人」を考察する場合、その射程は「包」論には収まり切らない。ただ、中国社会全体の「私人」については、「自由」の問題と絡めながら後述するとし、ここでは、「包」の構造における「私人」の問題に絞って分析を進めたい。柏が、「私人」という概念のなかで、とくに注目したのは、官僚の「私人」的性格である。上述した「我と汝」論、「投機的性格」と同じく、柏は「包」に触れる以前に抱いていたヨーロッパや日本などの常識とでもいうべき概念とは、まったく異なる官僚の姿を中国に発見する。そして、次のような結論を導き出す。すなわち、「中国の吏僚は、このような私人たる天子の単なる使用人ではない。あるいはまた、このような私人たる天子の機能の単なる分担者であるとみることもしかない。しからば中国の吏僚はいかなる性格のものであろうか。中国の吏僚もまた私人である。しかして天子と民の間に入って、その間の取引関係に「包」的に機能する第三者たる私人である」とし、官僚とは、「徴税を「包」的に確定化し請負う人であった」（柏 1986a pp.214-215）とする。このように私人的性格を帯びた官僚が、自らの私腹を肥やし、さらに、その官僚に群がる多数の「人」の姿を想像することは容易い。そして、そうした官僚の存在そのものが、国家全体の経済発展に寄与することができない、言い換えれば、そこに「停滞のシェーマ」を描くための一つの要因を見出すことは可能である。また、官僚の「私人化」という問題は、現代の中国社会においても散見できる事実であり、それは病魔のように扱われているといっても過言ではない。しかし、こうした非難をしばし横に置き、「包」の構造から「私人」の問題を見据えれば、「包」に連なる「人」とは、あるいは「包」の構造に組み込まれるためには、

「私人」であることが大前提であるということが出来る。すなわち、「私人」とは、官僚と民間、権力者と一般大衆という「人と人」の関係性を明示するものにほかならない。

第5に、柏は、「包」における「人と人」の関係性を、「掌櫃的は（「承包者」）、外観において東家（「出包者」）の使用人のごとく見えても、決してそうではない。東家の掌櫃的を聘するや、絶対にその行動に干渉することがない。もしこれに干渉することあるや、掌櫃的はその面子にかかわるものとして、極力これをきらうのである。されば東家と掌櫃的とは、雇主と使用人との関係ではなく、東家は財股を出し、掌櫃的は人股を出すところの合股の関係であるとされ得るのである」（柏 1986a pp.250-251。カッコ内は筆者加筆）とする。このように「包」の下では、「人と人」の関係とは、決して上下関係が築かれるのではなく、後述する加藤の言葉を借りれば、「対等性・水平性」が堅持されることが大前提となっている。つまり、上述したように官僚が、その権力を後ろ盾にして、その身分のまま「包」に連なることはできず、どこまでもすべての肩書を払い落した一人の「私人」として参加することが求められている<sup>12</sup>。

第6に、こうした「対等性・水平性」から、加藤は、中国社会の経済活動時における「自由」を取り上げ、「発展のシェーマ」を展開するが、柏も、このような「人」の「自由」を知らないわけではなかった。実際、「包」が生まれる背景の一つに、中国社会における「放任の自由」を幾度となく指摘し、「経済社会をとり出してみる限り、そこには自由・平等が否定しがたく存在していたのである」（柏 1986a p.90）と捉えている。しかし、そうした「自由・平等」に「人」の可能性について、柏はあえて避けるようにして、「停滞のシェーマ」を描くのだが、その理由については後述する。

以上、柏が描いた「包」的営みを行う「人」の「倫理観」あるいは「個性」をみてきたが、寄生的性格、投機的性格、「没法子」という言葉の背後に潜む「強い自己意識」、「私人」的性格という特徴が浮かび上がってくる。そして、「人と人」の関係性は、このようなネガティブ的ともいえる「個性」とはまるで相容れないような「対等性・水平性」あるいは「自由」という概念がその背後に横たわっていたといえよう。

### 3. 「包」の重層化

前節では、写真1の「球体」、すなわち「人」そのものについての分析を進めてきたが、ここでは、写真1が示す全体像について、つまり、「人」と「人」が重なり合いながら、いかなる経済秩序を形成しているのか、という点に焦点をあてる。まず、以下では、「包」の重層化を取り上げ、分析を進めたい。その特徴として、主に次のような点が指摘できる。

第1に、重層性の要因とは、上述した「我と汝」、「投機的性格」という面からすでに説明した通りであるが、「自分自身の中において作られた「汝」を見出すところの、いわゆる投機的態度は、かえって道程の短縮化をも意味しよう」（柏 1986a p.173）という柏の指摘をさらに加味すれば、「包」の重層化の構造をより詳細に知ることができる。つまり、「人」の投機的性格は、必然的に、資金回収の時間の短絡化が目指されるということであり、言い換えれば、自らの利潤を素早く獲得するため、急ぎ第三者が求められ、さらに、第三者は第四者、さらに第五者が見出されていくことである。その結果として、「包」の構造は僅かな時間で重層化していくことになる。そして、このように投機的性格を有する限りにおいて、「包」の重層化は避けられず、農業であれば、一つの土地に、商業であれば一つの商品に、多数の「人」が群がる状態が生まれる。すな

わち、投機的性格から「包」を読み解けば、それは、まるで賭場のテーブルの周りを「人」が取り囲み、それでいて、あれこれ次の出目を計算し、ありもしない法則性などについて考えを巡らせることはせず、また、出来るだけゲームの決着が素早く終わることを願いつつ、実際のプレーヤーに勝負を賭すだけという「包」の賭場的な性格が浮かび上がる。

第2に、このような投機的な性格から、一つの「包」の重層化構造の背後に、さらにいくつもの別の「包」の重層化構造が隠れていることを窺い知ることができる。すなわち、写真1は、ただ一つの「包」の構造を視覚的に捉えたものであるが、実は、そこには、それぞれの球体、つまり、「人」の背後に、その「人」から伸びてゆく別の「包」の重層化構造が潜んでいるケースが少なからず存在している。それは、いうまでもなく、資金を巡る「包」の構造である。たとえば、「出包者」であれ、「承包者」であれ、資金が必要となれば、地縁・血縁者、さらに民間金融によって調達されることになる。「資本市場もまた、「包」的な規律を持ち、いく人もの手をへて、転々として融資されることにあるのである」（柏 1986a p.181）というように、その調達方式も、「包」的に重層化することになる。言い換えれば、賭場のプレーヤーを囲むように存在する「出包者」や「承包者」の背後には、その賭場には決して姿を見せることはないが、無数の「貸付け」、不労所得を目指す「人」が存在しているといえよう。つまり、「包」の重層化とは、写真1だけに写る登場人物だけではなく、その背後には、資金的な「包」の構造に連なる無数の「人」が群がっている。

第3に、写真1の「人と人」の関係性を資金という面から捉えれば、柏は次のようにまとめている。「資本が人の世界から遊離し得ないのである。したがって資本は、人の世界において、その社会関係から自立し、自己自身

の運動法則に従って働くようにはなることがない」(柏 1986a p.203), さらに「蓄積された富が, 個々の人から離れて, それ自体として必然的な自己運動性をもつものにはならず, どこまでも人と人との間の契約的・間接的關係に密接に結びついてのみ, 在しているところに特異性がある」(柏 1986ap.208) と結論づける. このような柏の指摘を, 具体的に「包」の構造に落とし込めば, 上述した「人」の投機的性格に基づく資金は, どこまでも「人」から離れることはなく, 「包」の構造そのものに纏わりついたままであり, その構造の外側に資金が出ることはない. 言い換えれば, 仮に, 仕事が上手く完遂すれば, 「包」の参加者全員に資金は分配され, 逆に, 失敗すれば, この「包」の構造のなかに消えていくだけである. すなわち, 成功しても失敗しても, 資金は, 「包」の構造内部で自己完結し, 外部へ資金が流出しそれが蓄積され資本へと転化するよう経路は存在していない. そして, 柏は, このような状況をヨーロッパ社会と比較し, 資本家と企業者とが, 「金融業者を介して間接的に結びつく」(柏 1986a p.257) ような状況は生まれることはなかったと判断し, こうした特異な経済秩序を内包した「包」の重層化構造に「停滞のシェーマ」の大きな要因を見出したといえよう.

第4に, 上述したように「包」とは一つの賭場のようでもあるが, 「包」全体を俯瞰すれば, この表現は必ずしも正確とはいえない. もちろん, 「包」に参加する「人」とは, その仕事が上手くいけば, 投資額に応じての配分を手に入れ, 失敗に終われば損失を負うわけであるから, 「包」の賭場の性質を否定することはできない. しかし, その賭場には, 「元締め」がいるわけではない. もっとも, 写真1の「出包者」は, あたかも「元締め」のような存在に映るが, 「出包者」は, 必ずしもかけ金を総ざらいにしていくような存在ではない.

また, 賭場のリスクを一人で負おうているわけでもない. つまり, 「包」とは, 参加するすべての者に対して, 平等に公平に, その投資額に応じた利潤, 逆に損失のリスクが負わされている一つのシステムにほかならない. そして, このような状況について, 柏は, 一方で, 上述したように「利潤の分散化」の下, 資本蓄積がままならない点を「停滞のシェーマ」の有力な要因として捉えるが, 他方において, 「包」の構造に無数の人びとが重層的に連なることによって, 利潤も利潤獲得の機会も「社会的分散的」となり, 「利潤の社会化を招来せしめることとなる」(柏 1986a p.167) と指摘する. つまり, 「包」の構造を, 「人」の個性という点から捉えれば, それは, どこまでも欲望(とくに不労所得的な発想に基づくまたは他人任せで寄生的性格を帯びた欲望であるが)の寄せ集めのような性質を帯びたものであるが, それを社会的視点からみれば, 「利潤の社会化」というまったく異なる機能が浮かび上がるといえよう.

以上, 4点は, 「包」の重層化構造の特徴である. とくに, 柏は, 「包」を通して, 「利潤の社会的分散化」が達成されること, すなわち「利潤」が, 「包」の重層化構造のなかで, 社会化される点を「停滞のシェーマ」の大きな要因と捉える. そして, 「利潤の社会化」を「中国の一つの社会理想である分配的正義感に一致する動向であるといつてよい」(柏 1986a p.167) とし, この分配政策こそが, 「国家の政策として重要な地位を占めることともなったのである」(柏 1986a p.169) とする. さらに, 「まことにヨーロッパ的経済社会秩序が進歩=矛盾型の秩序であったのに対して, 中国の経済秩序は, 停滞=安定型の秩序であったのである. ヨーロッパ的経済社会の在り方に対し, 中国経済社会のあり方は, まったく対照的であるといわなければならない」(柏 1986a p.332) と, 中国社会の特徴を見出す.

もちろん、柏の導き出した「停滞＝安定型秩序」という結論に対して、吟味すべき点が多々残されていることは事実である。少なくとも「停滞」の定義すらはっきりしているわけではない。この点については、次号以降で分析を加えたとし、以下、「包」と「市場」、「価格」、「利潤」についての考察を進め、「停滞のシェーマ」の理解を深めたい。

#### 4. 「包」と「市場」、「価格」、「利潤」

「包」の重層化構造、または、「利潤の社会化」という機能を少し離れたところから眺めれば、ある一つの疑問を抱いたとしても不思議ではない。それは、無数の人びとが、一つの仕事、一つの商品に群がるなかで、人びとは、いかほどの「利潤」を手にすることができたのか、という問いである。そして、「僅か」であると回答を寄せてもなんら不思議ではない。すなわち、「包」の下で、僅かばかりの「利潤」を手にして、やっと生活の糧を手に入れることができたと安堵している人びと、逆に、「利潤」を手にすることに失敗して途方に暮れる人びとの様子を想像することは容易い。または、そのような小さな「利潤」を目指す前に、寄生的性格、投機的性格を改め、「我」のなかの「汝」に努力させた方が、現実的な対処法であり、より多くの「利潤」を手にすることができるだろうと、考えることはごく自然な発想でもある。しかし、このような疑問を抱き、人びとの姿を想像し、さらに、そこに変革を求めることは、一つの前提条件が、私たちの頭にあらかじめ刻まれているからにほかならない。その前提とは、需要と供給に基づき「市場価格」が成立している、という刷り込みである。すなわち、需要と供給の法則が貫徹するならば、必然、「包」の構成員の数にも、その法則が貫かれるだろう、という見方である。そして、一つの「商品」の「価格」に人びとが群がり、利潤を分け合い、と

くに、群がる人びとが必要以上に多ければ、必然的に、彼ら一人一人が手にする「利潤」は僅かであろうと、推測することである。しかし、「包」の下での「市場」、そして、「価格」、「利潤」とは、資本主義社会の実態とは大きく異なる。以下、柏の論に従い、それらについてみると、主に次のような点が指摘できる。

第1に、市場について、柏は、当時の中国の「市場」を二元的に捉える。一つは、国際的な開放市場であり、もう一つは、孤立的・閉鎖的市場である。そして、その二元性を次のように説明する。「北京や天津においては、世界の綿花相場・小麦相場に従って価格が成立し変動しておりながら、それからわずか数哩離れた郊外においては、あたかもそのような世界相場とはなんの関係もないような価格変動を含んだ地方市場が成立しているのである」とし、さらに、より具体的に、「たとえば清河地方は北京を去るわずか八哩であるのに、そこでの価格は、北京に比し、あるいは非常に高く、ある時は非常に低いという実情である」という事例を示す(柏 1986a P.175)。そして、こうした市場の二元性を見出し、いずれの市場も「包」的な規律を内包するものであるとする。前者の国際的な開放市場であれば、「包」の機能とは、無関係であるかのようにみえるが、買辦が、「包」的な役割を担っていたとする。彼らの存在そのものが、「中国をして、欧米資本主義諸国の半植民地たらしめたもの」にほかならなかつたと評する(柏 1986a P.277)。ただし、柏は、こうした開放市場よりも、「集・市・廟会などは、各地区・各時期において、それぞれに孤立的・閉鎖的に成立し、大都市市場価格とは無関係な市場価格が成立している」ような市場、つまり、中国各地に無数に散在する市場の特殊性に注目する。言い換えれば、孤立的・閉鎖的な市場こそが、「包」がもっとも展開する場所であると捉える。そして、「一物一価」が成立しな

い中国の特殊な市場、市場が統一されない要因を、この「包」の機能が如何なく発揮された結果であるとする。

第2に、「価格」と「利潤」についてみると、柏は、「価格があって、利潤が生まれるのではなくして、逆に危険負担すなわち利潤があって、後に価格すなわち市価が生まれるのである」と指摘する。つまり、危険負担とは、上述した「人」の投機的な性格と表裏をなすものであり、投機が、「利潤成立の根拠をも持つのである。危険負担のゆえに利潤獲得の機会を持つのである」とする(柏 1986a P.186)。そして、「中国においての利潤は、価格の内側にではなくして、むしろ価格(基準価格)の外側に成立するものである」といってよいと結論づける(柏 1986a P.185)。言うまでもなく、こうした「価格」と「利潤」の関係が、上述した「一物一価」が成立しない要因であるとともに、孤立的・閉鎖的市場の特徴にほかならない。また、このように「利潤」が成立していたとすれば、「包」に携わる人びとが「僅かな利潤」で満足していたわけではないといえよう。つまり、「価格」と「利潤」という視点から「包」を全体的に捉えれば、それらを自らがコントロールする力をその内部に有し、言い換えれば、あえて市場を開放させない力、どこまでも孤立的・閉鎖的な市場を維持する力を内包していたといえる。そして、人びとは、市場の外側に「いい値」を勝手に成立させ<sup>13</sup>、少しでも多くの「利潤」を手にするに邁進していた、と捉えることもできるであろう。

第3に、こうした「利潤」の獲得方法は、結果として、「包」のスクラップ&ビルドを促進させる要因にもなり得た。言い換えれば、より多くの利潤を手にするためには、「包」は、構成する「人」の手によって、絶えず変化が求められていた。柏は、「経済社会に招来せられる市価変動契機を、いち早く捉え、進んで

かかる変動を自ら大幅に作出するのである。不確実性したがって利潤機会を大幅に作り出すことによって、自ら莫大なる「包」的利潤を稼ごうとするのである」と(柏 1986a P.191)、孤立的・閉鎖的な市場の背後に潜む本質的性格を読み解く。つまり、無数に散在する市場では、不安定であり続けることによって、「価格」は絶えず変動し、そうした状況が作り出されるなかで、少しでも多くの「利潤」を手にするチャンスが生まれ続けていたといえよう。したがって、「社会的な不確定性の排除を意図するような動きは絶対に起こりえないであろう。社会的な不確定こそ彼らあらゆる層の生存の地盤なのである」とし(柏 1986a P.196)、中国における市場の統一の難しさが指摘されるとともに、不確定な状況こそが、人びとの望む社会状態であったとしている。

第4に、このような不確定性があえて作り出されること、または、それが多くの人びとが望むものであったとすれば、上述した「停滞=安定型社会」という図式と大きく矛盾する。少なくとも、市場が不安定であれば、社会の不安定化に直結するのではないかという疑問が浮かび上がる。しかし、「包」のスクラップ&ビルドとは、確かに、一方では、「人」が、より多くの「利潤」を獲得するための可能性を追求した結果であるが、他方では、そのスクラップ&ビルドが起きれば、「包」の構成員も、大きく変化する可能性を秘めていたといえる。つまり、「包」の構成員がシャッフルされるような状況が生まれることは、より多くの「人」に利潤獲得の機会を与えることに直接繋がり、「生存の地盤」が補償される、あるいは、補償される可能性を社会は絶えず秘めていたともいえるだろう<sup>14</sup>。こうした構成員のシャッフルがどのような基準で行われ、その結果として、どのようにして「社会の安定化」に繋がったのかについては、次節で詳しく述べたい。

以上、4点は、「包」と「市場」、「価格」と「利潤」についての諸特徴である。言うまでもなく、これら点も、「包」の重層化と同じく、いかにも「中国的なるもの」を顕わにする。まさにこうしたカオス的な状況とは、「停滞のシェーマ」の中核を形づくるものであるといっても言い過ぎではなかろう。しかし、ここまで柏に従い、「包」論の解説を試み、「停滞のシェーマ」が描かれた背景についての考察を加えてきたが、だからといって、すべてが鮮明になったわけではない。少なくとも筆者は、以下のような問題点が未解決のまま残っているのではないかと考えている。

## 5. 柏の問題点

柏が描き出した経済活動を営む「人」の「倫理観」あるいは「個性」、さらに「人と人」が織りなす一つの経済システムである「包」の諸特徴に触れば、そこに資本主義社会との違いを発見することは容易である。まさにその違いのなかに「中国的なるもの」が鮮明に浮かび上がり、「停滞のシェーマ」の拠り所を見出すことができる。しかし、筆者は、柏のすべてを全面的に受け入れることはできない。その理由は、柏そのものの論理あるいは思考のなかに存在する。一言でいえば、彼の「包」の定義そのものに疑念の根はある。柏による「包」の定義を持ってして、「停滞のシェーマ」はある程度語られたとしても、「中国的なるもの」のすべてを語り尽くしたとはいえない。言い換えれば、「停滞のシェーマ」とは、「中国的なるもの」のいくつかのピースを組み合わせただけであり、テーブルには、まだ、重要なピースが残されている。

今一度、柏の「包」の定義に戻れば、それは、「営みの不確定性を第三者たる他の人に転嫁して、もって確定化する秩序」であり、「経済者の営みの不確定性を、とくに人と人との間の取引関係において、確定化しようとする

規範」とするのだが、果たして柏が描き出した「人」または「人と人」の諸特徴が、この定義にすべて合致するのだろうか。たとえば、「汝」の不在、「寄生的性格」、「投機的性格」、「重層化」という要因は、この定義に当てはまり、「停滞のシェーマ」の要因を形成しているといえよう。しかし、それ以外の「私人」、「対等性・水平性」、「自由」といった要因は、この定義から抜け落ちてしまっているのではないか。さらに、上述した「市場」と「価格」・「利潤」の問題、とくに、「社会的不確定こそ彼らあらゆる層の生存の地盤なのである」という指摘と定義を比べれば、そこにひとつの矛盾点を見出すことは難しくない。少なくとも柏が描いた「人」とは、「確定化」を望んでいるのか、それとも「不確定化」を絶えず期待しているのか、どちらが「中国的なるもの」であったのだろうか、という疑問が即座に浮かぶ。何故、このような矛盾が柏自身のなかで生じてしまったのか。

以下、柏が重視しなかったピースをはめ込みながら、柏による「包」の定義及び「包」論を再考すれば、柏の問題点として、主に次のような点が指摘できる。

第1に、「営みの不確定性」とは、経済活動を行う場合、その報酬が初めから約束されていない、という意味であるが、それは、とりわけ中国だけの問題ではない。その営みが、市場を介する限り、この原則から決して逃れることはできない。それゆえ、柏が、「営みの不確定性」をその定義において第一の前提に据えることは、何ら問題はない。しかし、この「営みの不確定性」というありふれた言葉で「包」を語り始めると、それは、同時に、「営み」を有する「人」だけ、つまり「包」に連なっている「人」だけを対象としたものであるという限定を自らもうけることになる。もちろん、経済学者としての柏が、経済活動を中心に考えることは当然であるが、「包」を

構成する「人」だけを対象とすれば、それは、「包」が内包する「利潤の社会化」の意味を狭隘化してしまうことになる。少なくとも柏自身が唱えた「利潤の社会化」に基づく「社会の安定化」という重要な一つの結論は、「包」にかかわる人びとだけの「安定性」を確保するものとして受け止められてしまうだろうし、それは柏が望む評価ではなかったはずである。何故、このような粗さが残ることになってしまったのだろうか。筆者は、柏が、「包」についての思考を繰り返すなかで、「第三者の他の人」の選択基準についての分析が不足していたためではないかと考えている。

第2に、そもそも柏は、「第三者たる他の人」を選択する時、その基準を明確に示していない。柏がその選択に関して述べている箇所を抜き出せば、「包」的第三者は、自己以外に求められた人である」（柏 1986a P.159）、「単に見出された人の発見があるのみ」（柏 1986a P.187）というように、身分、地位、学歴、年齢、性別などの社会的因子が反映されているわけではない。むしろ、どこまでも「偶然の出会い」が支配している印象を持つ。もちろん、第三者の発見とは、宴会の席上、趣味などを通して、日常生活のなかでの偶然によって、その関係が結ばれていくのが、その実態により近いことに間違いはないであろう。しかし、筆者は、「偶然の出会い」のなかであっても、次のような選択基準が暗黙の了解として存在していたのではないかと考えている。まず、一つ目の基準として、資金力を挙げることができる。たとえば、図1の「出包者」から第1の「承包者」へ、さらに第2、第3の「承包者」へと末端へ行けばいくほどに、資金力は低下していったのではないだろうか。つまり、「第三者たる他の人」の選択基準は、下降的なベクトルを有し、自分よりも資金力の乏しい「人」が発見されていったのでなかろうか。二つ目の基準として、「包」の経験者

であるかどうかという点は、それほど重視されなかったのではないか。つまり、「包」に連なる「人」以外、たとえそれが、まともな仕事すらない不安定就業者や失業者であっても、「偶然の出会い」を通して第三者の対象となり得たのではないだろうか。言い換えれば、選択基準の下降的ベクトルは、とりわけ既存の「包」に連なる「人」の壁を突き破り、その外側にも及ぶものであったと推測される。つまり、上述した「包」の構成員がシャッフルされる時、その背後には、このような下降的ベクトルに沿って行われていたのではなかろうか。そして、こうした下降的ベクトルに従い、社会の隅々まで第三者の選択領域が広がることによって始めて、柏の唱える「社会的安定」が、真の意味で達成されることになったといえる。逆に、「包」のメンバーが固定化され、それ以外の「人」が「包」へ参加する機会を失ってしまった状態になれば、両者は、明確に分断され、その境界線の外側に矛盾は蓄積し、やがて対立が生まれ、社会の不安定化を招くことになったのではないだろうか。

第3に、このように「第三者の他の人」が、下降的な視線のなかで発見されている点を考慮すれば、「包」とは、柏の指摘する「営みの不確定性」という経済的範疇に留まらず、「人」の「生の不確定性」という社会的課題も担うものであるといえよう。そして、「生の不確定性」が、「包」のシステムの下で、「確定化」するならば、「包」とは、「セーフティ・ネット」の役割を果たすとともに<sup>15</sup>、同時に、柏が指摘するように中国社会が「放任の自由」の下で、すなわち、自らの身を自らで守らなければならない状況において、人びとの「生」にとって不可欠なシステムであったといえる。また、別の視点からみれば、「包」とは、一方では、人びとが「利潤」を獲得するためのシステムにほかならないのだが、他方では、格

差を是正する機能も内包したシステムであり、相矛盾する二面的機能を持ち合わせた極めてユニークなシステムといえる。もちろん、柏は、こうした「包」のユニークな側面を熟知していたはずであり、とくに、社会の安定装置としての「包」の機能が、資本蓄積にとっての大きな妨げになっていると考えてもいた。しかし、自ら導いた定義、なかでも「確定化」という言葉に縛られ、「包」を俯瞰することを怠り、いくつかの重要な要素を切り捨てることになってしまった。

第4に、柏は、その定義において、「包」とは、「確定化させる秩序」「確定しようとする規範」であるとしている。また、筆者も、「生の不確定性」が「確定化」されるものであると表現したが、筆者がいう「確定化」とは、どこまでも「一時的な」という限定的な意味を含む。少なくとも筆者の頭のなかには、「不確定」から「確定化」へと向かう直線的なベクトルは存在していないし、むしろ「不確定」な状態から一時的に「確定化」に向かうが、再び「不確定」な状態へと戻る、というパターンが繰り返される循環型のベクトルを想定している。すなわち、「包」とは、構成員としての「人」「人と人」の関係性などが、決して「固定化されないもの」といえる。しかし、柏は、「不確定」から「確定化」という直線的なベクトルの思考から逃れることはできなかった<sup>16</sup>。言い換えれば、加藤が指摘したように当時の「中国＝停滞」という通説的理解の制約から、柏が自由ではなかったと同じく、「確定化」に縛り続けられていた。確かに、中国においても、資本主義諸国と同じように、「営みの不確定性」を「確定化」しようとする合理性は存在する。この点に疑いの余地はない。しかし、この合理性とは一致しない固定化されない状況を生み出す要因も内在しているのだが、柏は、それらを軽視し、「停滞のシェーマ」を世に問うている。すなわち、

「人本主義的合理的秩序」の一部に過ぎない「汝」の不在、「投機的性格」、「寄生的性格」といった「人」の個性を重視し「停滞のシェーマ」は描かれ、逆に、固定化されない状況の要因ともいえる「生の不確定性」、また、以下で詳しく述べる「対等性・水平性」、「自由」といった概念は重視されていない。何故、そのような取捨選択を行ったのだろうか。それは、柏が、どこまでも「不確定」から「確定化」へという枠組みのなかで「停滞のシェーマ」を論じたからにはほかならない。むしろ逆説的にいえば、「確定化」という一つのゴールを設定しなければ、このシェーマは導き出されなかったといえよう。これが、筆者が考える柏の限界点である。そして、上述したような循環型のベクトルのなかで、あるいは「固定化されないもの」として「包」を捉え直せば、果たして「停滞のシェーマ」という結論に必ず辿り着くことになるのだろうか、という一つの新たな疑問点が浮かび上がってくる。そして、そこから「停滞のシェーマ」、「発展のシェーマ」を描くことは可能なのか、という問いかけへと進むことが重要である。さらに、「固定化されないもの」、あるいは「不確定」という概念は、加藤の「曖昧さ」という言葉を彷彿させる、といってもそれほど的外れではないだろう。この点は、次号以降で、詳しく論じるが、少なくともここでは、柏が用いた枠組みから離れ、「固定化されないもの」としての「包」の分析を進めなければ、本稿の主題である「中国経済のシェーマ」に近づくことはできない、という筆者の見解を示すにとどめておきたい。

第5に、柏も、上述したように「包」が「固定化されないもの」という認識がなかったわけではない。柏に従えば、「固定化されないもの」、すなわち、「社会的な不確定」または「生存の地盤」が作り出される背景は、「価格」の「変動を自ら大幅に作り出す」、「不確定性し

たがって利潤機会を大幅に作り出す」ことによつて、「莫大なる「包」的利潤を稼ごうとする」ものであるとする。つまり、「包」のスクラップ&ビルドが繰り返される要因は、「人」の投機的性格がその大きな要因であるとしている。もちろん、この要因を否定する必要はないが、この要因だけで「固定化されないもの」の背景を説明することはできない。また、「生の不確定性」を一時的に「確定化」するためという要因を加えてもまだ説明不足である。つまり、柏がテーブルの上に残したままの「対等性・水平性」、あるいは「自由」の概念を加味する必要がある。「対等性・水平性」、「自由」とは、ある一つの組織が、同じ構成員で維持され続けられれば、こうした概念を堅持することは決して簡単ではない。言うまでもなく、「包」の構成員が固定化されれば、能力差や資金力の差はやがて顕在化し、必然的に、そこには上下関係が生まれるだろう。ましてや上述したように「第三者たる他の人」が、下降的ベクトルの線上で発見されるのであれば、予め上下関係は用意され、そこに第三者、第四者は、部下として組み込まれてもおかしくはない。そして、そうした上下関係のもとで、自由とは程遠い命令、指揮系統のなかでの仕事を余儀なくされるのではないかと想像することは容易い。ところが、実際の「包」をみれば、「人と人」の関係性は、「対等性・水平性」であり、仕事に関する自由裁量権は与えられている。言い換えれば、「包」のなかに、誰の上司でも、部下でもない「私人」がその姿を鮮明に現す。何故、こうした状態が再構成され続けるのか、という問いかけに対しては、次号以降で詳しく述べるが、少なくとも、「対等性・水平性」、「自由」という概念が、「包」の特徴として看取できることは、単なる偶然の産物ではなく、人びとが「生存の地盤」を掴み取るために、「社会的に不確定」な状態を望むと同じように、「対等性・水平性」

さらには「自由」を得たいという願望が、「包」の特質とでもいうべき固定化されない状態を再構成し続けていると理解すべきであろう。

以上、柏の問題点を、その定義、すなわち、柏による「包」論の原点に立ち戻り、彼が利用したピースとそうでないピースを並べながら分析を進めてきたが、ここでは、あくまで柏の問題点を抽出したに過ぎない。「生の不確定性」と「社会の安定化」あるいは「格差問題」、「自由」という概念、「私人」という概念が、それぞれどのような意味を持ち、それらを「固定化されないもの」としての「包」論に引き寄せながら分析を進めなければ、「中国経済のシェーマ」に迫ることはできないだろう。ただし、そのような分析に入る前に、次号では加藤弘之に焦点を当て、彼が捉えた柏の「包」論、さらに、「曖昧な制度」、「発展のシェーマ」についての理解を深めたい。それは、一見すれば、本稿の主題からかけ離れていくようにも映るが、加藤弘之という存在は、「中国経済のシェーマ」を描き出すためには、決して避けては通れない道でもある。

(つづく)

#### 脚注 \*

<sup>1</sup> 日本福祉大学経済学部准教授（1963年～愛知県出身）

<sup>2</sup> 柏祐賢（1907～2007 富山県出身）。1933年京都大学農学部卒業。その後、農林省、京都大学助教授を経て、1947年に京都大学教授。1971年京都大学定年退官。同年、京都産業大学経済学部教授。1978年から京都産業大学学長。2007年死去（なお、略歴及び著作目録の詳細は『柏祐賢著作集』第25巻に掲載されている）。本稿における「包」についての考察は、『柏祐賢著作集（全25巻）』（京都産業大学出版会、丸善販売、1985～90年）を利用している。『経済秩

序個性論—中国経済の研究』は、『著作集』の第3～5巻に収録されている。

<sup>3</sup> 加藤弘之（1955～2016 愛知県出身）。1979年3月大阪外国語大学卒業。1981年3月神戸大学大学院経済学研究科博士前期課程修了，1982年3月神戸大学大学院経済学研究科博士後期課程退学。1982年4月大阪外国語大学助手，1985年4月神戸大学経済学部専任講師，1996年4月同助教授，1997年4月同教授。2006年4月-2007年3月外務事務官（在中国大使館公使，アジア政経学会理事長（2007年-2009年）などを歴任。

<sup>4</sup> 「包」（bao）を辞書で引けば，そのなかに「請負う」という意味は含まれているが，「承包」（cheng bao）と表記した方がより一般的であろう。ただし，本稿では，柏が用い，さらに加藤も継承した「包」という表記をそのまま使用する。

<sup>5</sup> この一節は，中兼和津次によるものである（中兼和津次 2014）。この中兼による批判に対して加藤は反論を行い（加藤 2014），さらにそれをより明確にするために本稿があるといっても言い過ぎではあるまい。

<sup>6</sup> 「中国的なるもの」とは，岸本美緒によるものである（岸本美緒 2006 pp.283～284）。このような歴史学者岸本の問いかけに対して，加藤は，柏の「中国的なるもの」，すなわち「包」論を引き継ぎ，「曖昧な制度」という一つの概念を導き出したといえよう。

<sup>7</sup> ここでいう 60 年という数字は，柏が『経済秩序個性論』を人文書林刊から出版した 1948 年を起点として，加藤が著作などで「包」を取り上げ始めた 2009 年前後（加藤 2009, 2010）との時間差からはじき出したものである。

<sup>8</sup> 柏は，その著作のなかで「停滞のシェーマ」という用語を使用していない。この言葉は，岸本美緒が使用した「発展」のシェーマ（岸本

美緒 2006）という言葉から着想を得て，筆者が考えた表現である。

<sup>9</sup> 加藤も，その著作のなかで「発展のシェーマ」という用語を使用していない。「停滞のシェーマ」と同じく，筆者が考えた表現である。

<sup>10</sup> 柏の「人」を中心に据えた研究スタイルの核心は，次のような言葉のなかに凝縮されている。すなわち，「ヘーゲルは，世界精神というような人間の営みを離れた力に，発展の原動力をみているが，マルクスは物質的生産力というような人間の営みを越えた力に，その発展の原動力をみている。前者は，その根元の力を観念的なものに，後者は，それを形而下的なものに見ている点で違っているだけである。ともに，人間社会の主体的なはたらきに目をそむけている」（柏 1987 P.125）。また，「私利私欲によって行動してきた人間を離れて歴史はない。私利私欲的な営みの発展と，その社会的な競争・交錯・支配の関係の中においてこそ，真に人間社会の歴史が作られてきたのである」（柏 1986b P108）としている。

<sup>11</sup> 柏は，「没法子」を汝が我に向かって語るとしているが，それ以外にも，他者が，「没法子」と言わなければ，投機的性格を強く帯びた社会は成立しないであろう。この他者がいう「没法子」については，《2016年8月4日中部産業新聞“オープンカレッジ”「没法子」と赤塚不二夫》参照。

<sup>12</sup> 「対等性・水平性」，「私人」についての事例として別稿（原田 2014a）参照。

<sup>13</sup> 改革・開放後，中国経済が世界経済に組み込まれるなかで，閉鎖的な市場は徐々に姿を消し，「いい値」での商売は成立しなくなったようにみえる。しかし，輸入品や奢侈品の価格が高価格であったことにより，偽物市場が生まれ，市場価格の内側に低価格商品市場が成立したともいえるであろう。そうした空間において「包」

的な営みが行われていた可能性は非常に高いといえよう。

<sup>14</sup> このような視点は、アマルティア・センの「潜在能力」の問題にも通じているのではないだろうか。「包」と「潜在能力」と絡めた論としては、別稿（原田 2016）参照。

<sup>15</sup> 「包」の「セーフティ・ネット」として役割については別稿（原田 2011）参照。

<sup>16</sup> 柏と「確定化」の問題については、別稿（原田 2014b）参照。

#### 参考文献

- [1] 柏祐賢（1986a）『経済秩序個性論Ⅱ』（柏祐賢著作集第4巻、京都産業大学出版会、1986年）
- [2] 柏祐賢（1986b）『危機の歴史観』（柏祐賢著作集第7巻、京都産業大学出版会、1986年）
- [3] 柏祐賢（1987）『学問の道標／大学の道』（柏祐賢著作集第13巻、京都産業大学出版会、1987年）
- [4] 加藤弘之（2009）加藤弘之・久保亨著『進化する中国の資本主義』（岩波書店、2009年）
- [5] 加藤弘之（2010）「移行期中国の経済制度と「包」の倫理規律」（中兼和津次編著『歴史的視野からみた現代中国経済』ミネルヴァ書房、2010年）
- [6] 加藤弘之（2013）『「曖昧な制度」としての中国型資本主義』（NTT出版、2013年）
- [7] 加藤弘之（2014）「中国型資本主義の「曖昧さ」を巡るいくつかの論点—中兼和津次氏の批判に答える—」（『国民経済雑誌』第210巻、第2号、2014年）
- [8] 加藤弘之（2016）『中国経済学入門—「曖昧な制度」はいかに機能しているか—』（名古屋大学出版会、2016年）

[9] 中兼和津次（2014）「「曖昧な制度」とは何か—加藤弘之『曖昧な制度』としての中国型資本主義』を読んで」（『中国経済研究』、第11巻第1号、2014年）

[10] 岸本美緒（2006）『中国中間団体論の系譜』『「帝国」日本の学知—東洋学の磁場』岩波書店、2006年）

[11] 原田忠直（2011）「中国におけるセーフティ・ネット形成と「包」の倫理規律」（『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』第123号、日本福祉大学福祉社会開発研究所、2011年）

[12] 原田忠直（2014a）「奇妙な宴会—アールントは着席するか？—」（『日本福祉大学研究紀要現代と文化』第129号、日本福祉大学福祉社会開発研究所、2014年）

[13] 原田忠直（2014b）「現代中国における「包」と「発展のシェーマ」についての一考察」（『中国社会の基層変化と日中関係の変容』（愛知大学国際中国学研究センター編、2014年）

[14] 原田忠直（2016）「農民工からみた中国社会—ある一枚の写真から読み解く中国社会」（『中国21』44号、愛知大学現代中国学会編、東方書店、2016年）